HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	一つの文書から何を読み取るか ： 近現代史の史料について
Author(s)	小松, 久男
Citation	日本中央アジア学会報, 15, 106-107
Issue Date	2019-07-31
DOI	https://doi.org/10.14943/jacas.15.106
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/88369
Type	journal article
File Information	JB015_013komatsu.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

一つの文書から何を読み取るか
—— 近現代史の史料について ——

小松　久男

本報告では近刊予定の論集『近代中央ユーラシアの眺望』に寄せた拙稿「言説空間の広がり——アブデュルレシト・イブラヒムの足跡をたどって」の内容を紹介したうえで、今後の近現代史研究の展望についていくつかの点を述べた。

この拙稿では1点のロシア語文書を取り上げた。これは1912年2月29日付で憲兵大尉ザズレフスキーがトルキスタン地方保安局長に提出した報告書であり、当時ロシアの保護国であったブハラ・アミール国の首都における汎イスラーム主義の動向について述べている。ロシア当局は、汎イスラーム主義はロシア帝国の一体性を破壊する危険なイデオロギーであるとして、その動向を注視し、多数の報告書が作成されていた。これらのほとんどは、先行研究が示すとおり汎イスラーム主義を警戒、敵視することで共通している。

しかし、当該の報告書はロシア帝国首相ストルイピンが名指しで非難したこともあるロシア出身の汎イスラーム主義者、アブデュルレシト・イブラヒムの動静を伝えながら、彼の目的や活動について肯定的に述べていることが注目される。たとえば､報告書は彼のことを「きわめて教養があって進歩と啓蒙の支持者であり、国際法にも通じた人物」と伝え、その動機と行動については､「イスラームは日ごとに弱体化し、ムスリムの君主は臣民をかえりみることなく、諸国や諸民族の法を知らず、虚栄と利己主義におぼれ、私欲を求めるばかり。学識者やカーディー、ムフティーはゆすりをはたらき、学知を求めるマドラサの住人も、正しい道をはずれて知識にうとく、手探りで歩むありさま。アブドゥラシド･イブラギム･エフェンディは、このような有様を見て、粗末なデルヴィシュのいでたちで故郷の町ブハラを去り、同志を求めて世界遍歴の旅に出た」と記している。これは多数の報告書の中にあってじつにユニークな評価と言ってよいだろう。

それでは、なぜこのような記述がなされたのだろうか。それは憲兵大尉自身が述べているとおり、彼はブハラでもっとも見識の高いウラマーと見なされていたハジ・ダムッラー・イクラムから情報を得ていたからだろう。イクラムは、イスラーム法の学識において卓越していたばかりではなく、清廉潔白の人士としても知られており、イスラーム世界の動向にも通

じていた。憲兵大尉は、イブラヒムをジャマールッディーン・アフガーニーからイラン立憲革命に貢献した一連の思想家・革命家の人脈の中に位置づけているが、こうした理解も、イクラムから得た情報によるものと考えられる。イクラムという情報源を持つことによって、この報告書は他の定形的な報告書とは異なる認識を示すことになったにちがいない。

そうだとすれば、ムスリム側の史料とのさらなる突合せが必要となるだろう。たとえばブハラのカーディー、サドリ・ズィヤーは、同時期の「日記」に「これら〔ヨーロッパ〕の文明化した人々がクレタやキプロス、タブリーズ、マシュハドなどのイスラームの諸地域で犯している無差別の虐殺やひどい略奪、文明化した強国の残忍なふるまい、これらのすべてはイスラーム世界を覚醒させ、ムスリムの間に共感とお互いを知ろうとする意欲を生み出したのである」と記しているが、こうした認識は、憲兵大尉の伝えるブハラにおけるジハードの気運やオスマン帝国・アフガニスタンの君主に対する期待感と重なっていることがわかる。

近年、А. Ю. Арапов や Б. Бабаджанов、Т. В. Котюкова らによってトルキスタン総督府などに集積されていたロシア語文書資料の公刊や研究が進められていることは心強い。これをさらに先に進めるには、当然のこととはいえ、同時代の現地語史料との比較・対照の必要性が不可欠だろう。一方、20世紀初頭のブハラに目を向けるとどうだろうか。ここは一見すると世界の辺境に見えるかもしれないが、先にふれたサドリ・ズィヤーの例を見ると、ここはロシア帝国はもとよりイスラーム世界、すなわちオスマン帝国やイラン、アフガニスタン、インドなどの情勢を眺望することのできる絶好の位置にあったと言えるだろう。これは、いわば世界史の「観測点」であり、辺境だからこそ見えてくるものがあるにちがいない。これは中央ユーラシア近現代史研究についてもあてはまることではないだろうか。ローカルなテーマに沈潜することなく、たえず世界史の文脈を意識することが必要と思われる。

（東京外国語大学）